

【日時】2025年9月4日(木) 13:30-15:00

【場所】ハイブリッド開催(オンライン・対面の併用)

【次第】1. 足元の状況
2. 今後の方針
3. 意見交換

次第1、2はそれぞれ資料に基づいて説明があった。意見交換における主なコメントは以下の通り。

＜各分科会における第2期の進め方やテーマ、連携の可能性＞

- インパクト投資はアセットマネジメントの1つという見方が強い中、間接金融がその議論に参画していることは日本の特徴である。銀行が、間接金融を通じてインパクトの創出にどのように貢献するか、また、インパクト投資を行う事業体として銀行がどのように評価されるかという観点を議論に加えていただくのはどうか。
- 分科会ごとの横連携を図りながら効果的な運営を進めていただきたい。第一線の有識者が参加しており、分科会が連携することでシナジー効果を出せればよい。
- 分科会の横連携は重要だが、分科会の運営は一定の負担があり、横展開には時間的、物理的な制約がある。インパクトコンソーシアムとして横連携を図るのであれば体制の見直しが必要だろう。すぐ対応できる横展開として、各分科会が足元の活動を気軽に情報共有できる仕組みを作ることが考えられる。例えば、データ・指標分科会ではインパクトデータベンダーへのヒアリングを企画しており、ヒアリング事項やヒアリング結果を他の分科会に共有することが考えられるのではないかな。
- 会員の離脱を防ぐために、対面で集まるイベントを企画して会員が会う機会を作ってはどうか。
- インベストメントチェーンの完成に向けて、金融と企業の連携は進んでいるが、アセットオーナーとの関係性も強めていくことが不可欠である。生命保険会社以外に、公的年金と企業年金を広く大きく巻き込むことでインベストメントチェーンが太くなると考える。
- アセットオーナーについて、第1期市場調査・形成分科会では生命保険会社のプレゼンテーションを中心に議論を行った。アセットオーナーは共通して、社会の構成員である受益者の資産を預かるうえで、インパクトの思考がアセットオーナー各社の存在意義や投資活動の原点にあることや、各社が投資戦略の中でIMMを整理していることを共有できた。また、インベストメントチェーンにおいて、アセットオーナーは、アセットマネージャーを通じて、ベンチャー企業などオルタナティブアセット、社会課題や環境課題の解決に取り組む企業が発行するボンドや上場株式への投資を行うことで、その育成を進め、金融のエコシステム形成を下支えしている。その上で、アセットオーナーが取り組む社会課題は非常に複雑であり、プレーヤーやステークホルダー同士の連携がない状態では、それぞれがミクロの社会課題をコレクティブに解決するだけでは、社会・環境問題の根源的な解決には繋がらないという問題提起がなされた。すぐに解決できる問題ではないが、様々なステークホルダーが集まるインパクトコンソーシアムから示唆を出すことで、各社のコレクティブな活動を通じて社会課題のシステム的な解決が実現することを期待している。
- 具体的な社会・環境課題を目の前にアセットオーナー、アセットマネージャーが議論すると、自然とシステミックに考えなければならないという結論に落ち着く。金融機関と企業が一緒になって議論し、考える場がシステミックな思考を持つために重要と考える。
- グローバルアドバイザリーパネルが各分科会のニーズを集約し、それぞれの最大公約数を取って海外連携の企画のたたき台を作ることではできだろう。各分科会が個別に動くことで、その他の分科会のメンバーのニーズ・海外機関と接する機会を取りこぼすことのないように、しっかりと国内の情報共有と横連携を行っていきたい。

＜国際的な議論との連携、海外への発信＞

- インパクトコンソーシアムのように多様なステークホルダーが横断的に議論し、活動するネットワークは他の国に存在していない、日本の長所であり、このような日本の取組を海外に発信することは重要と考えている。
- GSG Impact JAPAN とインパクトコンソーシアムのメンバーと活動が重複している。GSG Impact JAPAN は 2014 年からインパクト・エコノミーを推進するグローバルなネットワーク組織として活動を行っており、インパクトコンソーシアムが立ち上がった当初は、インパクトコンソーシアムは各分科会での議論、GSG Impact JAPAN は世界のネットワークとのつながりという点で棲み分けていると思っていた。第 2 期の活動においてグローバルアドバイザーパネルが海外との連携を強化する方針を掲げ、GSG Impact JAPAN とインパクトコンソーシアムの役割が重なり悩ましく感じている。特に GSG Impact JAPAN とインパクトコンソーシアムのメンバーが重複していることは問題提起したい。
- GSG Impact JAPAN、インパクトコンソーシアム、インパクト志向金融宣言など、それぞれの民間団体が海外発信やコネクションの強化に取り組んでいる。重なりはあるが、各団体が連携して企画することで、各団体メンバーのリーチが広がり、コミュニケーションが活発化することで、なお良い活動ができるのではないかな。
- 海外へのコンタクトが重なることがないようにできるだけ集約することが必要である。インパクトコンソーシアムとして、各分科会がそれぞれ動くことで二重、三重に海外にコンタクトすることのないように実務的な調整を考える必要があるだろう。
- イギリスの GSG Impact 本部がインパクト投資に限らず、資金供給と事業活動が一体となったインパクト・エコノミーを形成していくことを掲げ、GSG Impact JAPAN もその方針に倣い始めた頃にインパクトコンソーシアムが立ち上がった。その文脈で、金融庁が先頭に立ち、インパクト投資をはじめ、インパクト・エコノミーを日本で大きく広げていくことに GSG Impact JAPAN は最大限の協力をしており、これからも協力していくと考えている。
- インパクトコンソーシアムは立ち上がってまだ 2 年目であり、今は数多くの団体が引っ張ってインパクトのモメンタムを盛り上げていく段階にあるのではないかな。各団体の活動を整理することでモメンタムが終息するより、現状維持が望ましいと考える。国内から見ると各団体は違う役割を果たしているのだが、海外からは役割の違いが理解されず同じような団体が複数あると見られるのも当然であり、インパクトコンソーシアムでは、グローバルアドバイザーパネルが海外連携を整理いただければ良い動きができると期待している。
- インパクトコンソーシアムが GSG Impact JAPAN を介してグローバルなイニシアティブと繋がる時は、グローバルアドバイザーパネルがインパクトコンソーシアムの一元的な窓口として、GSG Impact JAPAN と連携してグローバルな活動をしていくと考えている。その意味で、グローバルアドバイザーパネルと GSG Impact JAPAN にはそれぞれの役割があると認識している。
- 海外の銀行融資とインパクトの取組としては、ヨーロッパが参考になる。特にスペイン、ポルトガル、フランスはインパクトの創出に向けて地域課題解決と融資を結び付けた取組が進んでおり参考にする価値はある。また、アメリカには 3.5 兆ドルのシステムレベル投資家がいる。アセットマネージャーやアセットオーナーを巻き込んでアメリカの投資家の知見を勉強することも考えられるだろう。
- 欧米だけでなく東南アジア、インド、韓国など近隣国に目を向けてほしい。シンガポールのテマセクの先進的な取組やインドのベンチャーキャピタルによるダイナミックな投資の動き、韓国でもインパクトの機運が非常に高まっている。
- 市場調査・形成分科会では、海外とのコンタクトは、ディスカッションメンバーそれぞれにかなりネットワークを持っている。グローバルアドバイザーパネルに一本化するとかえってネットワークが限られてしまう可能性があるのではないかな。

＜その他自由討議＞

- 地域・実践分科会や官民連携分科会で、全国の地域に出向く活動が好評と聞いている。裾野を拡大する観点から、ハイブリッドを活用して勉強会は地域で開催するのはどうか。
- 地域各地にインパクトに関心がある方が多く、地域の中で投資を回すしかない現実のなかで、スタートアップ委員会を立ち上げて何とか進めようとしている方々がいる。初学者向け勉強会を地域で開催

することで、そういった方々にインパクトコンソーシアムの知見が伝わり、何か生まれるのではないか。

- 熱心な自治体や地域金融機関など意欲のあるキーマンを見つけて一緒にやっていくことが、地域でインパクトを推進するためのポイントである。一方、中小企業の経営者など、キーマンとなり得るインパクトを創出する事業に投資する可能性がある方に説明してもなかなか理解が得られない。地域で勉強会を開催することで、理解が得られれば動きが変わってくるのではないか。

以上